

PsittaScene Vol 19 No 3 Aug 2007
シタシーン 19号 NO3. 2007年8月
ハイライト記事要約

これは、意識、要約ですので、科学誌などに引用をされる方は、適切な出典と共に、英語の本文をご参照ください。

Beyond the Science
Parrot conservation through education in Costa Rica
By Christine Dahlin

科学の向こうに
コスタリカで、オウム保護教育
By Christine Dahlin

私が、博士号取得のため、キエリボウシインコの野外研究をしにコスタリカを訪れたのは、2006年の1月だった。繁殖期がやってきて、最初のヒナ達が孵った時、私の助手達と私は、喜びに興奮していた。頭の上に生えている少しの羽を除いて、彼らはまだ、小さく、ピンク色で、羽は生えていなかった。彼らは、可愛らしく、次回の観察を楽しみにしていた。

ところが、2回目の観察では、現実を見せ付けられた。前回見た7つのすべての巣から、ヒナは消えていた。私の博士号のためのアドバイザーである、ティモシー ライト博士が1990年の半ばに報告した違法捕獲の状況は、残念ながら今も変わっていないようである。コスタリカでこのような捕獲は違法であるが、国立公園のシステムに十分な資金が与えられておらず、監視ができていないので、違法捕獲者は簡単に逃げおおせるのだ。

違法捕獲についてこんなに長い間、何の対策も取られていない現状は忍びなかった。何とかして、オウムを助ける必要があった。ライト博士と同僚のアレハンドロを含む、ニューメキシコ州立大学の研究所メンバーは、ワールドパロットトラスト、そしてコスタリカの保護団体（ACG Area de Conservación Guanacaste）と協力して、三種のオウム（キエリボウシインコ *Amazona auropalliata*、コボウシインコ *Amazona albifrons*、メキシコインコ *Aratinga canicularis*）の保護活動をすることにした。

オウムのエコロジーと保護活動を生徒達に教えることによって、オウム（がいる地域）に誇りを持ってもらい、彼らを保護したいという気持ちを宿してもらうことが、この活動の中心になる。プログラムは、主に6項目からなっている。巣の養子制度、壁画、教育パンフレット、巣の訪問、オウムのアート交換そして、巣の保護である。

まずは、巣の養子制度から始めた。2007年の2月、子供達はキエリボウシインコの4つの巣を“養子”にした。もし、ここからヒナが孵ったら、ワールドパロットトラストが100ドルを学校に寄付するというものだ。もし、巣が違法捕獲で荒らされたら、このお金は、ACGの保護活動へと回される。結果、2つの巣からヒナが巣立ち、2つの巣は違法捕獲でヒナを盗まれた。

巣の養子制度と同時に、オウムの壁画を学校の集会場に描いた。コスタリカ北部にいるすべてのオウムが描かれ、子供達も参加した。“オウムを守ろう”という言葉もスペイン語で書かれている。これは、すでに、コミュニティーのオウムへの誇りを示すものとなっている。

パワーポイントを使ったプレゼンテーション用の教材も作られた。その要点は、

1. 乾燥した森林に生息するオウムのエコロジーの基本
2. なぜ、オウムとインコは特別で、保護されるべきなのか
3. なぜ、オウムとインコは機器にさらされているのか：違法捕獲と森林破壊
4. 子供達にできること：例えば、オウムを購入したり、飼ったりしないなど。

生徒達は、実際にヒナのいる巣を訪れ、巣の中が見れるカメラで撮ったビデオを見たりもした。同時に、ヒナはなぜ野生にいるべきなのかということも学んだ。

子供達は、キエリボウシインコの絵を描くことや、メッセージを書くことで、プログラム中に学んだ情報を確認した。

これらの教育的な分野と共に、実際に巣を見張ることも必要であるから、ACGと協力し、最初の巣の監視を始めた。公園のレンジャー達に、巣のある所を見せ、彼らが繁殖期にその巣を監視できるようにした。監視の最初の日に、違法捕獲者を取り押さえた。

生徒達は、喜んでプログラムに取り組み、オウムについて学んだが、違法捕獲は、続いている。2008年には、このプログラムを他の学校にも広げていくつもりだ。WPT、ACGとニューメキシコ州立大学の協力によって、オウムの違法捕獲を減らしていけると信じている。我々のプログラムが、世界中にある、他の教育によるオウム保護のモデルになることを願っている。

写真のキャプション:

Viewing an amazon nest with the cavity camera.

ボウシインコの巣を特別なカメラで見ている。

Chris Dahlin and students listen to Yellow-naped Amazon calls.

クリス ダリンと生徒達は、ボウシインコの呼び声を聞いている。

5th and 6th graders wearing their WPT wrist bands with NMSU researchers and ACG staff in front of the mural.

壁画の前にて、NMSUの研究者と、ACGのスタッフと共に、WPTの腕輪をした5年生と6年生の生徒達。

Step Up:Command or Request?

By Barbara Heidenreich, Good Bird Inc

指に乗りなさい: 命令、それとも、リクエスト?

By Barbara Heidenreich, Good Bird Inc

オウムの記事や本などで、繰り返し言われてきたことだが、ペットのオウム達は、我々の指や腕に乗る命令に従わなければならない。従うと、命令という言葉は、私にとって強い意味合いをもっている。オウムが否応なしに命令に従わされているイメージが付きまとうのだ。

これには、鳥の胸のあたりを手で押して諭したり、すばやく鳥を手の中に掬いこんだり、止まり木から指を掬うようにして止まらせたりする行為が含まれる。

褒美によってトレーニングする私のようなトレーナーにとっては、あまりいいイメージとは言えない。なぜかって? もちろん、これらで鳥を手に乗せることができる。しかし、このトレーニング方法は、鳥が嫌々させられている方法を用いるからだ。鳥の胸に手を押し付けたり、手ですくいあげたり、その他、無理に手に乗せるのは、あなたがそれをどう解釈しようとも、オウム達にとっては、心地のいいものではない。無理やりさせることによって、反発することがある。その反発の一番一般的な物は、手が近づくと噛むことである。

オウムは、生まれた時から、手を見るなり噛むわけではない。噛むことによって、手が遠ざかるということを学ぶからである。攻撃性を軽く見るわけではない。“噛めるものなら噛んでみる”といい、噛んでもひるまないことを教えようとしている人をたくさん見てきた。そんな痛い思いをする必要はない。

一旦、手を怖がったり、手に攻撃的になってしまったオウムを、教えなおすのは簡単ではないが、不可能でもない。“噛む鳥”というレッテルを貼られ、諦められたり、無視されたりする鳥を見るの

は悲しいものだ。もし、飼い主が、褒め言葉や、褒美で教えることができたなら（ポジティブ レインフォースメント）、オウム達の経験もさぞ違った物になることだろう。

自由に飛べるトレーニングのプログラムを何年もしてきたが、何千ものオウム達が、手に対して、恐怖の反応や、攻撃性を示すのを見るのは、驚きだった。自由に飛べるトレーニングでは、もし、トレーナーがオウムの気に入らないことをすれば、オウム達はその場を離れることができる。

今まで、コンパニオンオウムのコミュニティでは、言うことをきかないと、怒ったり、罰したりする（ネガティブ レインフォースメント）のが常であった。しかし、これからは、褒めることでトレーニングをすることができる。オウム達は、嫌々従う必要はなく、褒美をもらえることを楽しみに、手にとまることのできる。

ポジティブ レインフォースメントの重要な点は、鳥に選択する余地を与えるということである。無理やり手に止まらせるのではなく、自分の意思で乗らせるのがゴールである。褒美は、餌であったり、頭をかいてあげるのもであったり、おもちゃや、褒め言葉であったりする。鳥の好きなものを見つけ、それを使うのである。

オウムを好ましい方向に来るように教える簡単な方法の一つに、くちばしをターゲットの方向に向けるというのがある。ターゲットは、何でもいい。そのターゲットを徐々に手の方に近づけるのである。鳥が乗りやすいようなポジションに手を位置し、動かさない。手を鳥の方へ持っていくのではなく、鳥が、自分で、ターゲットを追うことによって、手の方に近づくように仕向けるのである。

手が怖い鳥は、手に近づくにつれて、怖気づいたり、攻撃的になったりする。それでも、頑張って近づこうとする鳥には、褒美をたっぷりあげなさい。もし、攻撃的になれば、手を遠ざけ、褒めることを止める。これによって、鳥のボディーラングエージは、理解されたことを示してあげ、褒美がなくなることを示すのだ。近づく褒美がもらえることを繰り返すことによって、攻撃的な行動の頻度を減らすことができる。手を触ってきたり、足で乗ろうとしてきたら、しっかりと褒めるか、褒美をあげる。オウムは、自分の意思で手に乗ることによって、褒美がもらえるのだということ学ぶ。

我々は皆、オウム達に最高のことをしてあげたい。ポジティブ レインフォースメントによってトレーニングしたオウムは、あなたと一緒にいることを楽しみにする鳥になるだろう。オウムに選ぶ余地を与え、オウムの行動を理解してあげることは、信頼をはぐくむ。それは、手乗りの命令から、手乗りのお願いに変わる事なのだ。

Barbara Heidenreich is the owner of Good Bird Inc (www.GoodBirdInc.com). バーバラ ハイデンリックの連絡先：PO Box 684394, Austin, TX 78768 USA, info@goodbirdinc.com or 512-423-7734.

11 ページ、右枠の文章

無理やり手乗りにする結果は、

- 多くの鳥が手を噛むようになる。
- 噛み癖のせいで、飼い主に見放されてしまう。
- 多くの鳥が、怖がり、カゴの奥に逃げる。
- 噛み癖、または、人を怖がるので、多くの鳥が、カゴに入れられたままになる。
- 攻撃性と、怯えのため、これよりも酷い運命に苦しむことになる。

写真 キャプション：

Parrots can learn to bite hands that are used to force behavior.

強制されるオウム達は、噛むことを学ぶ。

Trainers that work with free-flighted birds rarely if ever use negative reinforcement or aversive stimuli to train.

自由に飛ぶ訓練では、ネガティブ レインフォースメントや、嫌がる刺激が使われることはほとんどない。

Using positive reinforcement to train your bird to voluntarily step up builds trust and understanding.
ポジティブ レインフォースメントによって、自分の意思で手乗りになった鳥とは、信頼関係を持つことができる。

**A Moluccan Treasure:
Conservation of endangered Indonesian Parrots
Text and Photos By Mandy Andrea**

**宝のオオバタン
インドネシアの絶滅危惧オウム達の保護
Text and Photos By Mandy Andrea**

私は、インドネシア パロット プロジェクト (IPP) のエコツアーに参加し、インドネシアのセラムという島を訪れた。セラムは、モルッカスの島の一つである。このツアーのハイライトは、マシウランという村から歩いて、IPP の立てた 46 メートルのタワーに登ることだ。

ミドル モルッカの島々で、以前は、よく聞かれたので、オウムの名前は、モルカン コッカトゥー (英名: Moluccan Cockatoo) と名づけられた。現在では、野生のオオバタンは、セラムしかないのではないかと考えられている。

彼らの声が聞こえる。今回は、もう一羽が、他の一羽に答えた形だ。彼らがねぐらへ帰り始め、鳴く声が聞こえてきた。プラットフォームからは、ねぐら周辺が見える。最初のオオバタンが出てきて、木々の間を渡る。しかし、すぐ木の陰に隠れてしまう。何分か後に、もう一羽が現れた。2羽か、3羽のグループになりながら、この世の物とは思えぬほど白いオオバタン 8羽は、日暮れで暗くなるねぐらへと到着した。我々も、ここで夜を過ごすために、しゃがみこんだ。夜明けと共に活動する鳥達を見るためである。

インドネシア パロット プロジェクトは、インドネシアに生息する野生のオウム達を保護し、守るのを目的としている。オウム達を守るために、リハビリセンターとサンクチュアリを運営し、現地のコミュニティーと共に取り組んでいる。

IPP は、(オウムを保護することへの) 誇りを持ってもらい、違法捕獲の悪影響を知ってもらい、代替法を与えるために、特に、生徒達に教育も行なっている。

この記事を書いた Mandy Andrea は、IPP の役員会議にも勤めている。もっと詳しく知りたい方は、www.indonesian-parrot-project.org を参照。

写真のキャプション

Seram Island as seen from the Masihulan platform. From this bird's eye view, guests can observe birds that fly by or just underneath.

プラットフォームから見る、セラム島。ここからは、鳥達が飛ぶ姿が、目の高さ、または、下に見つろすように見ることができる。

Guests emerge through the jungle canopy at 35 meters overlooking a sea of trees and continue skywards to reach the platform.

ツアーのメンバーは、地上から 35 メートルに位置する木々の頂上から現れると、そこから、また、プラットフォームに辿り着くために登っていく。

Soni, an ex-trapper who now works for IPP, demonstrates the fabrication of a trap lined with nooses.

以前は違法捕獲者であり、現在は IPP のために働いているソニーという男性が、わっかのたくさんついた罠を、デモンストレーションとして作っているところ。

A male Eclectus left hanging after a playful flying romp with a female on Betanta, West Papua.

西パプアのベタンタで、メスとじゃれた後、ぶら下がっているオスのオオハナインコ。

Peering through the dense foliage, we caught glimpses of what appeared to be attempts at nest takeover first by a pair of hornbills, and the next day by a pair of Eclectus.

サイチョウ類の鳥が、最初で、次の日には、オオハナインコのつがいが、巣を乗っ取ろうとしているであろう所を垣間見た。

The female Eclectus, being more aggressive than the male, is the doorkeeper.

オスよりも攻撃的なメスのオオハナインコは、巣を守っている。

Cockatoos strip the area surrounding the opening bare of bark and plant growth to prevent easy access by predators such as lizards.

コッカトゥー達は、巣穴の周りの木の皮はぎ、同じく、周りに生える植物を取り除く。これは、トカゲなどから、巣を守るためである。

Every day, one or two Palm Cockatoos visited a tree right in front of our guesthouse on the island of Betanta, West Papua.

毎日、一羽か、二羽のヤシオウムが、西パプアのベタンタの我々のゲストハウスの前にある木にやって来た。